［第五話］

大愚良寛

大愚良寛とは、禅宗の坊さんとしての正式の名前です。良寛さんは子どもたちと、かくれんぼをしたり、手まりをついて遊んだ、童心そのもののお坊さんとして、どなたもご存じでしょう。

こじき坊主同様の生活でしたが、その和歌や漢詩・書道は、それぞれの領域において超一流であり、平凡なようで非凡、純粋そのものの人生を送りました。

越後出雲崎（新潟県）の名主であり、神主であった橘屋の長男に生まれ、名主失格、出家の道を選びます。備中玉島（岡山県）の円通寺で修行したあと、諸国を放浪、やがて故郷に帰り、国上山の五合庵などで暮らします。

良寛さんにはたくさんの逸話や、よく知られた言葉があります。第一に紹介したいのは、文政年間の三条大地震のときのことです。

死者千六百人、負傷者千四百人といわれ、推定マグニチュード七の大変な地震でした。良寛さんが親しい友人に出した見舞い状の一節。

「災難に逢う時節には災難に逢うがよく候。死ぬ時節には死ぬがよく候。これはこれ災難をのがるる妙法にて候」

――災難にあったらジタバタしないで、その災難を真正面から受けとめなさるのがよい。死ぬときにはさからわないで死ぬのがいちばんよい。これが災難や死をのがれる最高の方法・態度ですよ。

良寛さんの弟の子に、馬之助という道楽息子がありました。この甥に意見することを頼まれた良寛は、弟の家に泊まり何度も馬之助と顔を合わせますが、話を切りだすことができません。どうしても自分の若いころの姿と重なって、もっともらしく意見や説教ができないのです。三晩が過ぎて四日目の朝、五合庵に帰ると言って玄関で、馬之助にわらじのひもを結んでくれるよう頼みます。

しゃがんで、叔父のわらじのひもを結ぶ馬之助の襟もとに、冷たいものが落ち

ました。はっと見上げた馬之助には、良寛の両の目から涙がこぼれるのが見えました。馬之助の道楽はこの日からぷっつりとやんだのです。この逸話は、教育というもののほんとうのありかたを私どもに教えてくれるようです。

「実践人の家」を創始された教育者森信三先生の名著「修身教授録」に、「良寛戒語」のことが述べられています。良寛の和歌や漢詩はたくさん本になっていますが、文章は「良寛戒語」のほかにはあまりありません。

戒語とは、言葉についての戒めという意味でしょう。「さしで口・自慢話・はなしの長き・手がら話・老人のくどき」に始まり、お嫁に行く女の人に与えた戒語には、「ゲラゲラ笑い・ふくれ面・むだ口などかたくやめなさい」と、教えています。良寛さんのまったく別な一面をうかがわせるもので、現代の青少年に実にためになる内容でありますので、とくに家庭で親が、学校で先生が熟読活用されることをおすすめします。

良寛さんは七十歳で、若く美しい貞心尼とめぐりあい、少年少女のように純真

な恋をしました。この恋もまた二人にとっては仏法でした。貞心尼に看病(かんびょう)されながら亡くなった良寛の辞世(じせい)の句は、

「散るさくら　残るさくらも　散るさくら」

天保二年（一八三一）七十二歳没

○　童心⟶「素直(すなお)」と理解しました。

○　良寛さんが馬之助に流した涙は現代の教育のお手本ですね。

○　さしで口、自慢話、はなしの長き、手がら話等、全て私はいつもしています。猛反省をしました。

（M生）